

伊勢物語 関守、白玉、他

男(在原業平)と二条の后(藤原高子)の物語集

ひじき藻(むぐらの宿) 三段

1 傍線は読解に役立つ重要語・重要文法事項。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。タイトルも段番号も元々は書かれてないので、教科書によって違いがある。

昔、男ありけり。懸想<sup>けさう</sup>じける女のもとに、ひじき藻といふ物をやるごとて、

思ひあらば葎<sup>むぐら</sup>の宿に寝もしなむひじきものには袖<sup>そで</sup>をしつゝも<sup>2</sup>

2 ひじき藻はひじきのこと。(引)敷き物

二条の後の、まだ帝<sup>みかど</sup>にも仕まつり給はで、たゞ人にておはしましける時のことなり。

2 ひじき藻はひじきのこと。(引)敷き物との掛詞。葎の宿なのでちゃんとした布団がない様子。

彦星に 九十五段

昔、二条の後に仕<sup>つか</sup>うまつる男ありけり。女の仕<sup>つか</sup>うまつるを常に見かしてよはひわたりけり。「いかで物越<sup>こ</sup>に<sup>て</sup>対<sup>てい</sup>面<sup>めん</sup>して、おぼつかなく思ひつめたること少しはるかきむ」といひければ、女、いとしのびて、物越<sup>こ</sup>しに逢<sup>あ</sup>ひにけり。物がたりなどして、男

彦星<sup>ひこぼし</sup>に恋はまさりぬ天の河へだつる関を今はやめてよ

この歌にめでゝあひにけり。

わが通い路の関守(築地の崩れ) 五段

昔、男ありけり。東<sup>ひむがし</sup>の五条わたりに、いと忍<sup>しの</sup>びていきけり。みそかなる所なれば、門よりも入<sup>い</sup>らで、童<sup>わらわ</sup>のふみあけたる築地<sup>つひぢ</sup>のくづれより通<sup>か</sup>ひけり。人しげくもあらねど、度かきなりければ、あるじ聞きつけて、その通<sup>か</sup>ひ路<sup>ぢ</sup>に、夜<sup>かよ</sup>ごとくに人をすゑてまもらせければ、行けどもえ逢<sup>あ</sup>はで歸<sup>かへ</sup>りけり。さてよめる。

3 忍で行ったのだから、女のところに通っているという平安常識。それが女の父などには秘密の場合ももちろんあるだろう。

人知れぬわが通ひ路の関守はよひよひごとくにうちも寝<sup>ね</sup>ななむ

とよめりければ、いといたく心やみけり。<sup>4</sup>あるじゆるしてけり。

4 心を痛めたのは誰か、文脈から一人しか考えられない。

二条の后にせうにしのびてまゐりけるを、世の聞えありければ、兄人せうとたちのまもらせ給ひけるとぞ。

芥川（白玉か） 六段

昔男ありけり。女のえ得うまじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出いでて、いと暗くきに来けり。芥河あかたといふ河を率みていきければ、草のうへに置をきたりける露を「かれはなにぞ」となむ男に問ひける。<sup>5</sup> ゆくきき多く、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らず、神さへいとみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓、胡ぐひを負ひて、戸口6にをり。はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎにえ聞かざりけり。やうやう夜もあけゆくに、見れば率こて来し女もなし。足こずりをして泣けどもかひなし。

白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを

これは、二条の後の、いとこの女御の御もとに、つかうまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄人堀河のおとゞ、太郎国経くにつねの大納言、まだ下臈にて内へまゐりたまふに、いみじう泣く人あるをきゝつけて、とゞめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなり。まだいとわかうて、後のたゞにおはしましける時とや。

言の葉 五十五段

昔、男、思ひかけたる女の、え得うまじうなりての世に、<sup>7</sup>

思はずはありもすらめ言の葉のをりふしごとに頼まるるかな

<sup>5</sup> ここで女の質問がこのように描かれている意図は何か。歌の伏線にもなっている。また、推測される男の様子はどんなものか。

<sup>6</sup> こうした情景の男の描き方と、男の気持ちはどうなるのか。

<sup>7</sup> 二条の后すなわち藤原高子は二五才で年下の天皇の女御になつて手の届かぬ雲井へ行つてしまいます。あなたは私を思わないでいるだろうが、あなたの言葉を折々につけてどうしても頼みに思われるのです。

西の対（月やあらぬ） 四段

昔、東の五条に大后おほきさきの宮おはしましける西の対たいに住む人ありけり。そ  
れを本意ほんいにはあらで、心こころぎしふかかりける人、行きとぶらひけるを、む  
月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人  
の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂うれしと思ひつつなむありけ  
る。又の年のむ月に、梅の花つばきざかりに、去年こぞを恋ひて、行きて、立  
ちて見、みて見、見れど、去年こぞに似るべくもあらず。うち泣きて、あば  
らなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる、  
月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして  
とよみて、夜のほのぼのとあくるに、泣く泣く帰りにけり。

小塩の山 七十六段

昔、二条の後の、まだ春宮とうきゅうの御息所みやすんじと申しける時、氏神にまうで給  
ひけるに、近衛府このゑのかみにさぶらひける翁、人々の禄たまはるついでに、御車  
より給はりて、よみて奉りける。<sup>11</sup>

大原おほはらや小塩せしほの山も今日けふこそは神代かみよのことも思ひ出いづらめ<sup>12</sup>

とて、心にもかなしと思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。

古今和歌集卷五 秋 二百九十三 二百九十四

二条の後の春宮のみやす所と申しける時に、御屏風に龍田川にもみち  
ながれたるかたをかけりけるを題にてよめる。<sup>13</sup>

もみぢ葉のながれてとまるみなとには紅深き浪やたつらん

業平朝臣

ちはやぶる神世もきかずたつたかはから紅に水くゝるとは

8 二条の後（藤原高子）  
9 帝に近い藤原氏の娘に恋する（本意）なんて無理なことは分かってるが。

10 普通の身分の者が行き来できない所、すなわち宮中。二条の后が帝の女御として後宮に入ったことを意味する。

11 御息所は皇太子を生んだ女性のこと。車の二条の后から直接いただいた。翁は在原業平

12 神代、遠い昔のこと。

13 二条の后は帝の女御になってから、和歌のサロンを主宰していた。これが以降に続くサロンの始まりと言われる。和歌の業平を思つて、あるいは会うために開いたのかもしれない。七十六段と同じ「神代」が使われている。紅葉の錦は高子のことだとい説がある。